

## 近江商人

近江商人は、近江国（現在の滋賀県）の商人で、16世紀から19世紀にかけて全国にその名を轟かせた。遠く離れた都市や町に企業を設立し、その鋭いビジネス感覚と勤勉さ、そして公正な取引の精神で高い評判を得た。また、明治時代の日本経済の近代化にも貢献し、彼らが興した事業の多くは、現在も活躍する企業へと発展した。彼らが築き上げた富は、近江八幡の旧市街に立ち並ぶ邸宅に反映されている。

近江の商人たちは、それぞれの地域特有の品物を扱い、地域ごとに活躍していた。八幡商人は、蚊帳や畳表、麻布製品などを扱っていたのが代表的である。1600年代前半に事実上の首都となった江戸にいち早く出店し、蝦夷地（北海道）の開発にも携わった。また、シャム（タイ）やアンナン（ベトナム）まで足を伸ばした八幡商人もいた。

近江商人は、勤勉、儉約、誠実な商いを信条としていた。これは、江戸社会で、何も生産しないために社会の最下層に位置づけられた商人や外部の人間に対する根強い疑念を克服するための行動規範でもあった。

自分たちの哲学を表現するために、いくつかの原則を持っていた。例えば、「始末して気張る」という表現は、今あるものを最大限に活用し、努力することが長期的なビジネスの成功につながるという信念を表現している。もう一つの原則は、「三方よし」という言葉に集約され、これは「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしの取引でなければならないという意味だ。

また、「隠徳善事」という言葉もある。これは「隠れた徳と善行」という意味だ。近江商人は、自分の商売は社会に役立つものでなければならない、世間に大きな声で言わずに富を分かち合うべきだと考えていた。その社会貢献は例えば、学校や道路、橋の建設などの公共事業への資金援助であった。